

輸血療法委員会

委員長 佐竹朋美

活動内容

輸血療法委員会は、高知県合同輸血療法委員会と連携を保ちながら、「適正輸血の推進」を実践する事を目標とし、病院長、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務、外部委員（高知県赤十字血液センター）などの輸血に関わる多部門のメンバーで構成され、隔月（偶数月）に開催しています。また、高知県内で最初の I&A 認定施設としても認められています。

血液製剤の使用量と廃棄率、副作用に関しては下記の通りです。

輸血後の HCV, HIV 感染の発生はなくなり、HBV の年間 3 件程度となり、現在輸血後感染症検査の全例実施の必要性もなくなっており、輸血用血液の安全性の高まっております。感染が疑われる例は引き続き精査や調査を継続しておりますが、重篤な副作用もなく経過しております。

輸血製剤の使用量は増加しており、今年度は過去最高の値となっておりますが、廃棄率はかなり少ない状態で維持できております。COVID 感染症のためここ数年献血量が減少してきており、今後も安全で適正な輸血療法の実施と廃棄量の減少に努めていきます。

輸血用血液製剤 使用量・廃棄率（2014～2023 年の推移）

2023 年の輸血用血液製剤使用量は、2022 年と比較し 5%増加しています。

2023 年の廃棄率は 0.5%となっています。

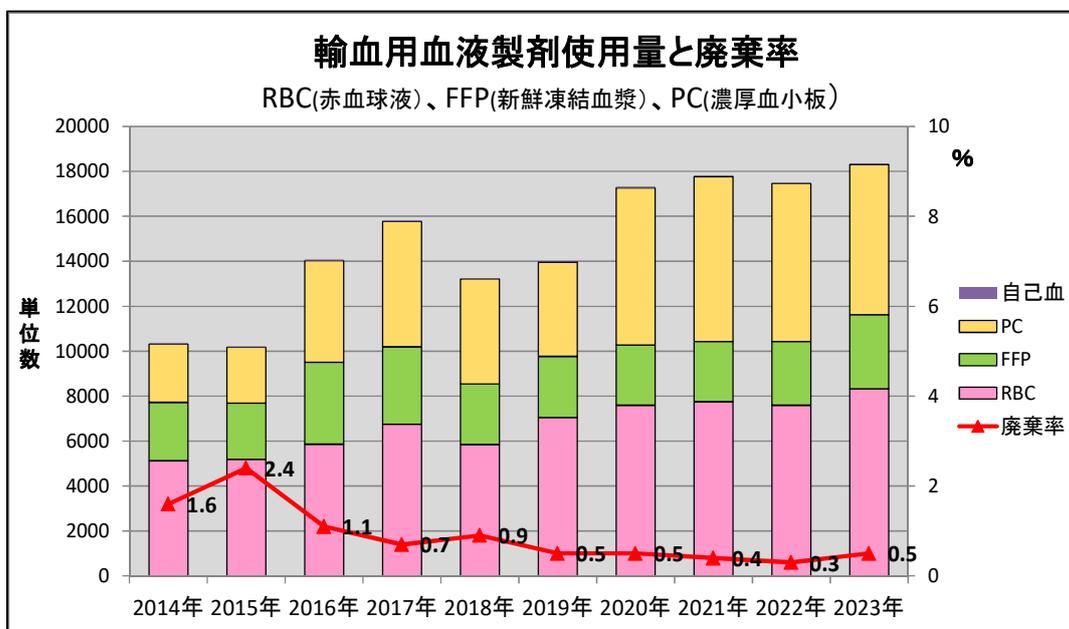


図 1

輸血用血液製剤 科別使用量

RBC（赤血球液）は、心臓血管外科の使用量が1744単位と最多で、循環器内科が1536単位、消化器内科が1376単位でした。FFP（新鮮凍結血漿）の使用量は心臓血管外科の1258単位、PC（濃厚血小板）の使用量は血液内科の2390単位が最多でした。

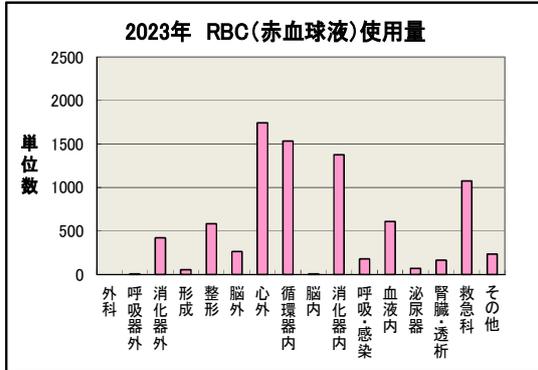


図 2

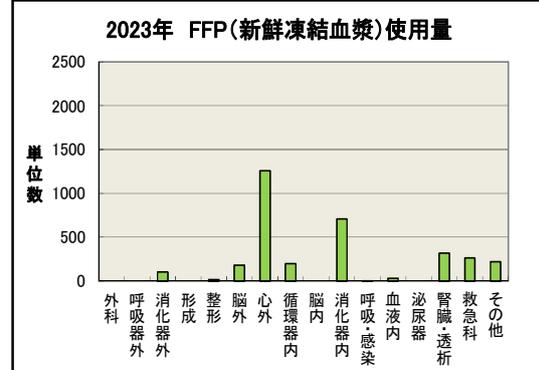


図 3

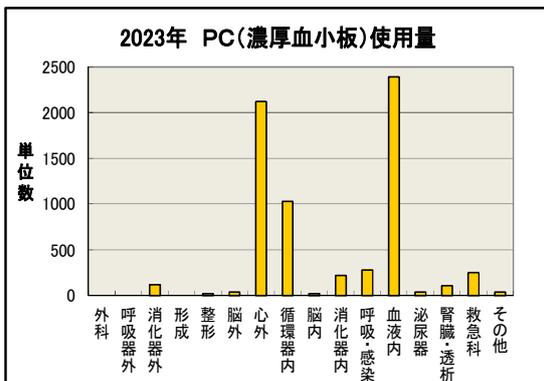


図 4

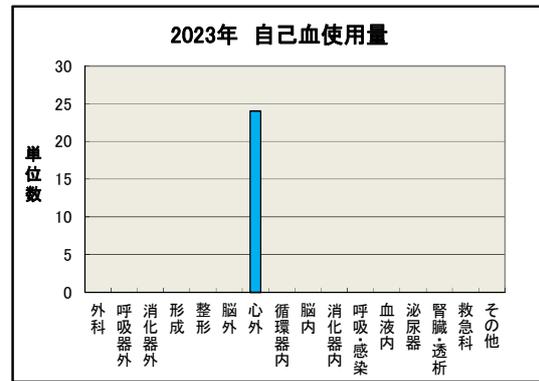


図 5

アルブミン製剤 使用量

2023年の総使用量は昨年に比べて増加しており、内科の使用量が増加しています。

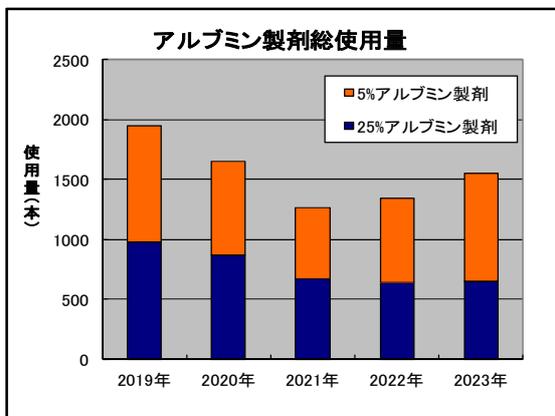


図 6

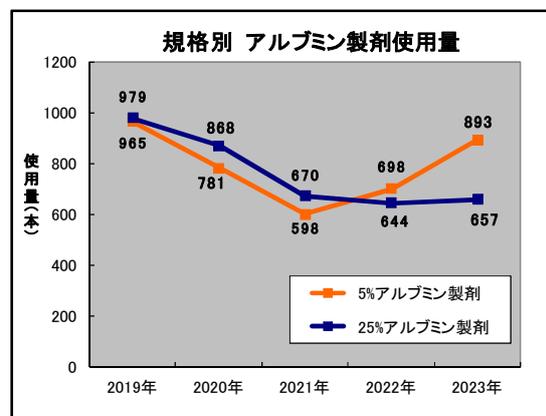


図 7

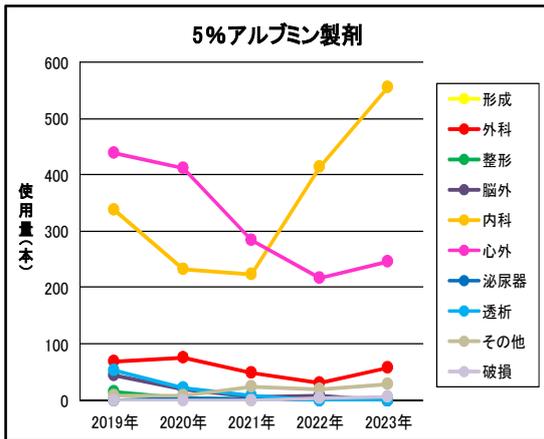


図 8

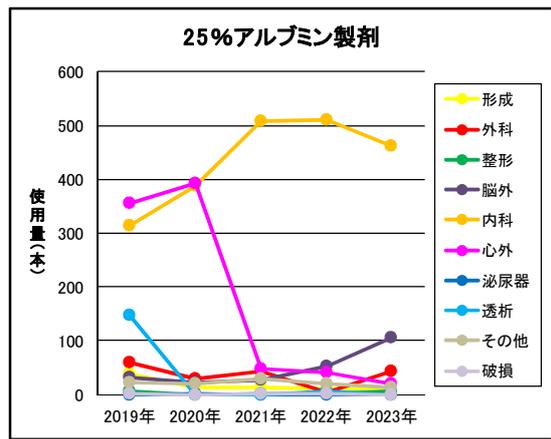


図 9

タイプ&スクリーン (T&S) 件数

2023年の依頼件数は1278件、実施率は11%で減少傾向です。診療科別の依頼件数では、整形外科が多く、次いで心臓血管外科、消化器外科と続いています。

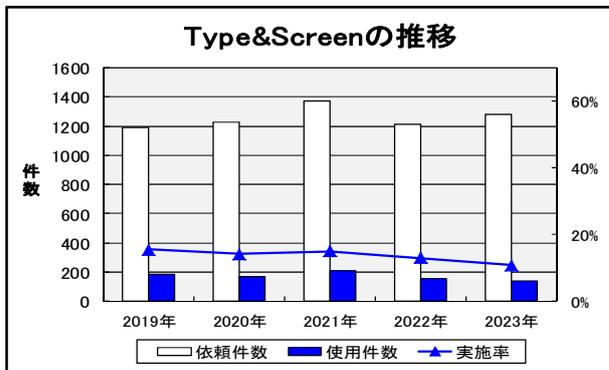


図 10

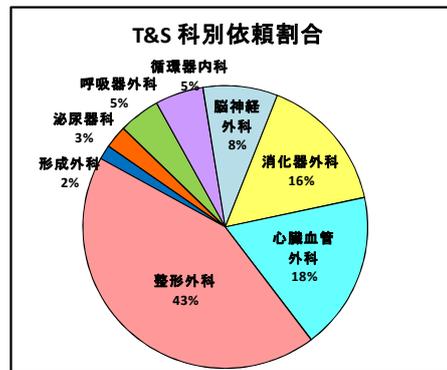


図 11

自己血件数

2023年の心臓血管外科手術（開胸・開腹術）は合計192件、整形外科手術は59件、合計251件に回収式自己血を施行しました。一方、貯血式自己血は11件でした。

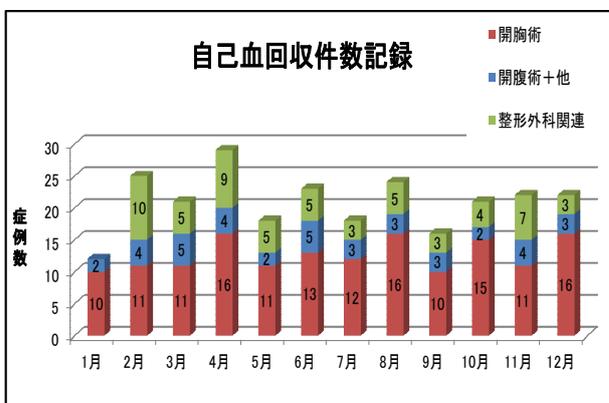


図 12

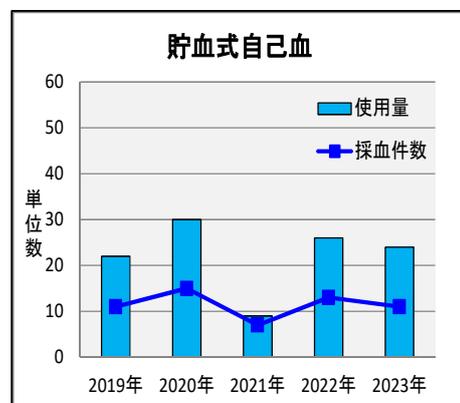


図 13

副作用報告

発生率は 2.1%で、重篤な副作用はありませんでした。

表 1

	副作用			使用量	
	バック数	実人数	発生率	バック数	単位数
	123	36	2.1%	5741	18332
【製剤別】					
RBC	60	29	1.4%	4160	8332
FFP	47	14	5.2%	901	3296
PC	16	10	2.4%	668	6680
自己血	0	0	0.0%	12	24

表 2

副作用項目		副作用件数		
		RBC	FFP	PC
A.非溶血性副作用		73件	74件	20件
症状項目	①1℃以上の発熱	24	3	1
	②蕁麻疹	8	12	4
	③悪寒	7	0	0
	④戦慄	2	0	0
	⑤冷汗	0	0	0
	⑥発疹	13	30	10
	⑦掻痒感	0	11	0
	⑧悪心	1	0	0
	⑨嘔吐	0	0	0
	⑩胸痛	0	0	0
	⑪顔面紅潮	0	0	0
	⑫血圧低下	0	0	0
	⑬アナフィラキシー様反応	1	0	0
	⑭ショック	0	0	0
	⑮ヘモグロビン尿	0	0	0
	⑯その他	17	18	5
B.溶血性副作用		0件	0件	0件
急性溶血				
遅延性溶血				
C.輸血後感染症		0件	0件	0件
HBV				
HCV				
HIV				
その他				
合計(件)		73	74	20

注: 件数は全てバック当たりとします。ただし、A)の症状項目のみは重複可とします。